

●ヤコブ・ミュールラッド (1991~)

『REMS』(短縮版)

オーケストラのための (2021/23)

スウェーデン出身のヤコブ・ミュールラッド(1991~)は、デビューからわずか10年後にドイツ・グラモフォンから作品集がリリースされるなど、近年著しい活躍をみせている。同国では珍しいユダヤ教徒であり、また幼少期から読字障害(ディスレクシア)に悩まされた彼は、音楽祭やコンクールといったアカデミックな舞台には立たず、北欧・バルト3国で盛んな合唱音楽で頭角を現した。その荘重で内省的な音楽は、「ホーリー・ミニマリズム」とかつて商業的に括られたペルト、タヴナー、グレッツキを嚆矢とする、1970年代以降の宗教的音楽と相通ずるものがある。

2021年に初演された、ストックホルム・コンサートホールとロイヤル・ストックホルム・フィルハーモニー管弦楽団の共同委嘱作『REMS』で、ミュールラッドは初めてフル・オーケストラに対峙した。タイトルは、人間が夢を見る睡眠の状態である「レム睡眠(rapid eye movement sleep)」を意味する。ここでミュールラッドは、夢と睡眠のもつ「謎めいた、心震わせるような側面」を探究すべく、自身の見る夢と睡眠を音に置き換え、さまざまな文化の子守歌、インドの夜のラーガなどを参照、約26分におよぶ音のタペストリーを織りあげた。

今回初演される短縮版は、原曲のほぼ4分の1に相当する約7分の長さをもつ。音楽的には、楽章などによる区切りをもたない原曲の、冒頭から約4分の1までをほぼそのまま切り取ったものである。これに続く、旋律が前面に押し込まれた表出力の強い箇所はカットされているが、結びは原曲と同様である。冒頭、静的で線的なテクスチャが瞑想的な雰囲気醸成を促し、弦楽器と管楽器が、狭い音程内でのポルタメントを繰り返す。やがて弦楽器が2群に分かれ、短いグリッサンドを急速に反復し、その後管楽器も同じ動きを行い

強奏へと至る。最後は背景として、クロタル、タイ・ゴング、水に浸された1本のチューブラー・ベルが、ガムランのゴングさながら周期的に鳴り響く。

[平野貴俊]

Fl / Picc / A-Fl / 2 Ob / E-Hrn / Es-Cl / 2 Cl / 2 Fg / C-Fg - 4 Hrn / 3 Trp / 2 Trb / Bs-Trb / Tub - Timp - 4 Perc (Tam-Tam / 2 Bass Drums / 2 Tom-Toms / Tri / Vib / 2 Crotales / Chinese Gong / Tubular Bells / Waterphone / Mar / Thai Gongs) - Strings (min. 12-10-8-8-5)

●オルガ・ノイヴィルト (1968~)

『オルランド・ワールド』(2023)

ウィーン国立歌劇場はイオアン・ホレンダーの長く保守的な総監督時代を引き継いだドミニク・マイヤー時代に、トーマス・アデス(1971~)やペーテル・エトヴェシュ(1944~)の新作を含む現代作品上演や現代的な演出を擁した一大改革を敢行し、保守的な音楽の街ではそれがなにかと物議を醸した。それは現在のボグダン・ロシュチッチ時代にも受け継がれていっそうエスカレートしているが、マイヤー時代のもっとも大きな成果が、この劇場150年の歴史上初めて女性作曲家に新作を委嘱して2019年に世界初演したことだろう。それがノイヴィルトの『オルランド』であった。

『灯台へ』や『波』と並ぶ、イギリス・モダニズムの代表的な女性作家ヴァージニア・ウルフの名作のひとつを原作(邦題は『オーランドー ある伝記』と表記されてきた)とするこのオペラは、コム・デ・ギャルソンの川久保玲による衣装をはじめ、演出をポーリー・グレアム(当初の予定はカロリーネ・グルーバー)が担当、台本作成はフランス系アメリカ人の劇作家キャサリン・フィルーと作曲者本人のコラボというように、制作陣の多くを女性が占めたことでも話題を呼んだ。

原作はすでにそのはるか以前、1992年にサリー・ポッター監督、ティルダ・スウィントン(『ナルニア国物語』で白い魔女を演じた)主演で映画化されており、その両性具有的な主人公の存在が現在

の性多様性につながる意味で大きな可能性を秘めた物語として着目はされていた。ジェンダー／セクシュアリティに発する多元的な問題に常に眼を向けてきたノイヴィルトが題材とするに、これほど相応しい原作はなかっただろう。

原作『オーランドー』は、両性具有を女性の視点から描いた作品として当初から注目されたが、近年ジェンダー／クイア(包括的な性的マイノリティ)研究でますますその度合いが高まっている作品である。16世紀末に生まれた青年貴族オランダが、容姿ゆえにエリザベス女王の寵愛を受け、失恋を経たのちに詩集『樫の木』を完成させ、また2回の昏睡を経験したあとに目覚めると女性になって詩作を続けるという話。女性ゆえに世間には認められない詩作を介し、またヴィクトリア期の子供虐待の歴史などを目の当たりにしつつ、彼女は男性が作り記録していく歴史に疑問を感じながら20世紀まで生き、女性としての生涯を悦びのうちに続けていく。

原作は1598年に始まり、初版出版日の1928年10月11日(木)深夜の日付で終わっているが、オペラ台本はそのあと、ユダヤ人迫害(これはユダヤ系のノイヴィルトにとっても切実な問題)を含むナチ時代と原爆を伴う終戦、戦後の喧噪からオペラ初演日の2019年12月8日まで続く(公演のたびにこの日付は延長された)。戦後、詩人のオランダは現代の詩人とも言うべきロック歌手になり、また彼／彼女の子としてトランスジェンダーの歌手ジャスティン・ヴィヴィアン・ボンドが実名で登場して「ノンバイナリー」(男女どちらの性別をも意識しないセクシュアル・アイデンティティの保有者)の解放を訴えるなど、現在から未来にかけてのジェンダー／セクシュアリティ解放のメッセージが強くなって、クイアな存在のルーツとしてのオランダの意味が強調されていく。また最終的に児童合唱を交えて声高に、同時に繊細に自由な未来への希望が歌われていく。

今回初演される組曲版は、全19景からなるオペラのなかから、ことにその前半を中心にしてオランダの歌唱部分とその前後のオーケストラ部分をつなぎ合わせて構成されている。恋人サーシャ

やシェルマーダイン、オランダに批判的な作家で、彼／彼女同様にやはり300年以上生き続けている「怪人」ニコラス・グリーン、あるいはエリザベス女王といった重唱相手の歌唱パートがすべて削除されているため(合唱のことはほんの一部や児童合唱の歌う「希望」という歌詞、そしてボンドの歌の一部がオランダによって歌われている)、歌詞は一方通行的で断片的な印象を受けるが、それは『ヴォツェック』や『ルル』の組曲でも同様ではあろう。むしろ、ノイヴィルトの創り上げる、エンターテインメント性をも十分に盛り込んだ万華鏡のようなカコフォニック(ノイズ的)な音響世界と、その根となっている物語世界でのオランダの多様性、そして未来へ託された希望を聴き取ること、ここではそれが肝要だろう。

使用楽器のなかでは一部の調律が変えられている(ハーブシコードは443ヘルツのオーケストラより低い425ヘルツに調律、逆にエレキギターは高く、約454ヘルツに調律、ピアノはプリペアされる)。第二次世界大戦後の場面でドラムキットとエレキギターが加わって音楽は進む。エリザベス朝時代のリュート音楽やマドリガルからオフエンバックの『地獄のオルフェ』まで、さらにはクイーンやレディー・ガガ、ファイヴ・ステアステップスなどからの引用もさまざまな箇所に見られては消える。まさに、現代オーストリアでいちばん尖った作風で、かつクラウド・ノミのようなポップな音楽へのアンテナも多次元に張り巡らせて、加えてきわめて知的でもあるというノイヴィルトの面目躍如たる作品になっている。

[長木誠司]

M-S - 2 Fl (Picc / Lotus Fl) / 2 Ob / Es-Cl / Cl / Bs-Cl / A-Sax / 2 Fg (C-Fg) - 3 Hrn / 3 Trp (Picc-Trp) / 2 Trb / Tub - 3 Perc (I=Vib / 3 Thai Gongs / 7 Crotales / 3 Cowbells / Tam-Tam / Suspended Cym / Timp / Snare Drum / Tom-Tom / Wood Block / Tri / Thunder Sheet / Metal Block / Anvil / 2 Auto-Brake Drums / 2 Mechanical Car Horn / Sleigh Bells / Guiro / Chinese Opera Gong / Ratchet II = Tubular Bells / 4 Thai Gongs / 6 Crotales / 5 Cowbells / Tam-Tam / Tri / Suspended Cym / Bass Drum / Tom-Tom / 2 Temple Blocks / Metal Block / 2 Auto-Brake Drums / Guiro / Sand Blocks / Mechanical Car Horn / Anvil / Reception Bell / Rolmo Cym / Metal Plates III = Glock / 3 Thai Gongs / Tam-Tam / 7 Crotales / Timp / Tom-Tom / Snare Drum / Suspended Cym / 5 Cowbells / Tri / Wood Block / Metal Block / 2 Auto-Brake Drums / Anvil / Thunder Sheet / 2 Mechanical Car Horns / Sleigh Bells / Guiro / Chinese Opera Gong) - Electric Guit - Prepared Pf - Harpsichord - Strings (12-12-8-6-4)

●オルガ・ノイヴィルト (1968~)

『旅／針のない時計』

オーケストラのための (2013/15)

流れゆく時のなかで揺れ動く事物について

「ヴルタヴァ河とドーナウ河の間

そして私の幼少期を過ごした河の間で、

すべてのものが私についての概念を持っている。」

インゲボルク・パッハマン、プラハ、1964年1月*1

2010年、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団から、グスタフ・マーラーの没後100周年記念のための管弦楽曲の作曲を依頼された。私は2011年末までにふたつのオペラを仕上げなければならなかったので、辞退せざるを得なかった。

委嘱が2015年まで延期されたとき、私は、2010年からマーラーを振り返るという考えを捨てたくないと思い至った。その間、私は自分のオーケストラ作品にとって「音楽的な乱気流」の引き金を引くような夢を見たのだった。

私は祖父には会ったことがなく、写真と祖母の話を通してしか知らないのだが、その祖父が夢のなかに現れた。さざ波の寄せるドーナウの河畔、日の差し込む草むらで、葦の絡まる帯となりながら無数の緑の葉が風になびいていた。祖父はその草むらの中央に立ち、カタカタと音のする古いテープレコーダーに乗せて次々と歌を歌ってくれた。彼は言った、「はじめからわしは驚くほどの変わり者じゃった。はずれ者で、オーストリアの環境に溶け込んでしまうことなどできなかったのじゃ。生まれてこのかた、ずっと疎外感を感じておった。これらの歌を聴いてみい——これこそわしの物語じゃよ」。彼は時間から落ちこぼれ、私もその体験を共有した。

私はこの夢にいたく感動し、それを作品創作を通して焼き付けておこうと考えた。というのも、私にとって書くことは常に記憶と関係しているからだ。それを聴くひとが、あたかも自分が夢

見たものを聴いているかのようなものに仕上げる。聴いている間、聴き手自身が夢を見ているような気分させること。

『旅 *2／針のない時計』は、記憶がどのように薄れていくのかということについての詩的な考察と見なすことができる。この作品では、私の祖父が人生の途上で過ごしたまったく異なる場所や経験から得た旋律の断片がいくたびも組み合わせられる。それは「形ある流れとなった記憶」である。曲はひとつの「グリッド」を構成し、そのなかでは歌の断片が何度も鳴り響き、つなぎ合わされる。同時に、メトロノームのようなビートに基づいた「音楽的オブジェ」があり、それが時間を聞こえるもの、知覚できるものにする。このメトロノームのようなビートは回転木馬のように現れては消える。けれども回転木馬とは異なり、それらは同じままではなく、コンテキストのわずかなずれとさまざまなテンポの重ね合わせのなかで毎回変化する。この「メトロノームの刻み」によって、すなわち外側から制御された時間の脈動によって、時間そのものが無意識という、主観的に時間のない領域となる。最終的に時間は溶解するように見える、すなわち針のない時計となるのだ。

私の祖父は激動の歴史を有する海沿いの街で生まれた——この街はヴェネツィアの支配下にあったこともあれば、ハンガリー=クロアチア同君連合の支配下にあったこともある。その後、彼はクロアチアとハンガリーの国境にあるドーナウ河流域で育った。だから、祖父もドーナウ河畔での子供時代について書いたカネッティと同じく、次のように感じていたのかもしれない。「子供のころ、私はその多様性を洞察することができなかったが、それによるさまざまな影響は絶えず感じとることができた」*3。そして「…私という人間は、自分ではけっして意識していないような多くの人間たちからできあがっている。」*4 このように、この作品は私にとって、河によって聞かれ海へと運ばれるさまざまな(音楽的)物語についてのものなのだった。その河こそ、私に

とってドーナウなのだ。

マーラーの話に戻ろう。世界初演後、彼の交響曲第1番は“Katzmusik”（盛りの付いた猫の鳴き声音楽、ノイジーな音楽）と呼ばれ、折衷主義だと批判された。しかし、それこそ私が興味を持った点だ！私はこの音楽的な現象、そして「寓話的な時代からの古代の香り」、具体的にはドーナウ河畔での祖父の幼年期と思春期を探求したかった。ローベルト・ムーシルがその小説『特性のない男』のなかで「カカニア」と呼んだオーストリア=ハンガリー帝国時代の伝統的世界を、私の現在の生活の地平から振り返って見たかったのだ。アイデンティティとルーツを求めるために。おそらくこの作品は、何でも好きなように作曲できる「否定的な意味での自由」を感じ、それゆえムーシルの言う「特性のない人間」に近いものを感じているオーストリアの一作曲家の、皮肉でメランコリックな「白鳥の歌」なのである。

『旅／針のない時計』は、断片化された私の出自に由来する多声的な響きと、途切れることのない流れを求める私の願望からできあがった。この流れは作品全体を通して絶え間なく入れ替わる細胞によって作られている。

私にとって“Heimat”（故郷、祖国）とは漠然としたものだ。『旅／針のない時計』では、「いくつかの祖国」を持っている人間という考え方への応答を試みている。すなわち、自分の音楽であると同時にそうではない音楽を通して。それは馴染みのある響きと馴染みのない響き、あらゆるカカニア的なノスタルジーを超えた先にあるものであり、それを作曲によって時間を止めるという不可能な試みのなかで捉えるのだ。

[オルガ・ノイヴィルト／長木誠司 訳]

注)

- *1 インゲボルク・バッハマン「ブラハ 64年1月」(『インゲボルク・バッハマン全詩集』中村朝子訳、青土社、2011年、332頁)
- *2 タイトルの「旅」の原語はヘブライ語の“Masaot”である
- *3 エリアス・カネッティ『救われた舌』(岩田行一訳、法政大学出版局、1981年、5頁)
- *4 同上、138頁

3 Fl (Picc) / 3 Ob / 3 Cl (Es-Cl / Bs-Cl) / 2 Fg / C-Fg - 3 Hrn / 3 Trp (Picc-Trp) / 2 T-Trb / Bs-Trb / Tub - Cel - 3 Perc (I=Vib / Tubular Bells / 2 Gongs / 5 Crotales / Tom-Tom / Cym / 2 Cowbells / Wood Block / Ratchet / Metronome II=Guero / Inkin / Glock / Crotales / Snare Drum / Bass Drum / Tri / Cym / Tom-Tom / 2 Cowbells / Small Bells / Metronome III=Japanese Temple Bell Daitokuji / Gong / Tam-Tam / 4 Crotales / Tom-Tom / Cym / 2 Cowbells / Tri / Wood Block / Ratchet / Metronome) - Strings (16-14-12-10-6)

初演 2015年5月6日 ケルン・フィルハーモニー

ダニエル・ハーディング(指揮)、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団

献呈 ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団

●アレクサンドル・スクリャービン (1872~1915)

交響曲第4番 作品54「法悦の詩」(1905~08)

帝政ロシア末期のピアニスト兼作曲家アレクサンドル・スクリャービン(1872~1915)が「法悦の詩」の創作に取り組んだのは、1905~08年のこと。これは、彼が祖国を離れて西欧諸国を歴訪しながら、リストとワーグナー、また西欧の哲学・神智学を探求し、音楽書法の新機軸を生み出そうと試行錯誤していた時期にあたる。彼は最晩年、ほとんど「無調的」とまで言われるようになる独特の和声語法にたどり着き、ロシアのモダニズム音楽の時代の寵児となるが、本作はその出発点の一つとなっている。

興味深いことに、スクリャービンは楽曲の発表より一年先立って、同じく『法悦の詩』と題された詩作品を出版している。「魂が／生の渴望に励まされ／否定の高みへの／飛行へと誘われる」……と始まる369行にもわたる長大な自由詩は、最終的には音楽と全く別個の作品として切り離されたという。しかしそれでも、スクリャービンが当初、詩と音楽を新しい形で関連付けようと意図していたことは明らかだろう。実際、詩の筋書き——主人公の「魂」が自由に「遊び、愛撫し、喜び」、最終的に自身の芸術の栄光を誇り称える——と音楽の道筋を比べてみると、何らかの

かたちで詩と音楽が対応しているものとして聴くことができるように思われる。

「法悦の詩」の単一楽章の音楽は、自由に変形させたソナタ形式による。楽曲の前半に提示されるいくつかの主要動機は、詩と音楽の内容にかんがみて、例えば3連符の跳躍による「意志」、震えるような装飾音を交えた軽やかな「飛翔」、ファンファーレの「自己肯定」などと名付けられている。それらが絡み合いながら成り立つ構造は一見複雑に思われるが、動機それぞれは簡潔ながら个性的で、楽曲の進行の中で発展過程を追うことができる。動機の変奏・展開とともに音楽のスケールは次第に増していき、鐘の音すら伴うハ長調の高らかなファンファーレと、その後の主和音の激的な強奏により、楽曲は盛大に喜ばしく締めくくられる。

[山本明尚]

3 Fl / Picc / 3 Ob / E-Hrn / 3 Cl / Bs-Cl / 3 Fg / C-Fg - 8 Hrn / 5 Trp / 3 Trb / Tub - Timp - Bass Drum / Cym / Tam-Tam / Tri / Glock / Bells - Cel - Org (or Harmonium) - 2 Hrp - Strings

初演 1908年12月10日 ニューヨーク、カーネギーホール
モデスト・アルトシュラー (指揮)、ロシア交響楽協会

Orlando's World**Orlando:**

I am alone
 For looks and sighs true love can best express.
 And he whose words his passions right can tell.
 Doth move in words than in true love excel.
 Oh, why is reality so multiple and complex?
 An old body that smells like fur kept in camphor.
 The night,
 The candles, bright.
 The silent silent glen,
 The clanging of serving men.
 The poor thing, ... her skin scarred by smallpox, half bald.
 Elizabeth, the great patron of great poets.
 Will she read my poems?
 My knee
 For the old woman loves me.
 Sasha! My pet.
 Convention means nothing to me.
 Snow melt!
 Melt me
 You
 Melt me
 "Jour de ma vie."
 You are my first love.
 I love you!
 Sasha, I'll ruin my career for a Cossack woman and a waste of snow –
 My jewel, my own, Sasha, my fox, my pet.
 The sun, blood red, sinking...
 Sasha?
 Jour de ma vie!
 The clock.
 Two... Three... Six? Seven...

『オルランド・ワールド』**オルランド:**

ほくは独りだ
 容貌や溜息よりも本当の愛が一番の表現だ。
 自分の情熱を正確に語りうることばを持つ男。
 彼は愛に秀でるよりまさにことばの世界に入り込む。
 ああ、なにゆえ現実はいかにも多様にして複雑なのか?
 樟脳の染みついた毛皮のような匂いのする老人の身体。
 夜、
 ろうそく、明るい。
 静まりかえった谷間、
 召使いたちの喧噪。
 哀れにも、…女王様の肌は疱疹痕が残り、頭は禿げかけている。
 エリザベス、偉大なる詩人たちの偉大なる保護者よ。
 ほくの詩を読んでいただけますか?
 跪きます
 この老女はほくを愛しているのだから。
 サーシャ! ほくのかわいいひと。
 慣習などほくにとっては無意味だ。
 雪が融かす!
 ほくを融かして
 きみが
 ほくを融かす
 「ほくの生涯最良の日」
 きみはほくの初めての恋人。
 愛してる!
 サーシャ、ほくはコサック女と不毛な雪と引き替えにキャリアを棒に振ろう—
 ほくの宝石、ほくだけの、サーシャ、ほくのあやかし、かわいいひと。
 太陽が、血のように赤く染まって、沈んでいく…
 サーシャ?
 人生最良の日だと!
 時計だ。
 2...3...6? 7...

Sasha
 Faithless, mutable, fickle, devil, adultress, deceiver.
 I need company.
 I invite you to speak about the sacred subject of poetry
 Shakespeare? More venison? Wild fowl? Wine?
 I, myself, have been so rash to write... poetry...
 Would you give me your opinion on my poetry?
 I am done with men
 Done with men.
 I have asked the King to make me an ambassador
 to the land farthest away.
 To beat, to kill, to defame, to kill, to kill, to beat, to kill, to stab, to stab, to stab, to beat, to kill
 Bodies fall, pools of blood rise around them.
 Bodies
 Blood everywhere

Am I a woman?
 There is no doubt.
 For there is no doubt, a woman.
 Finally I'm alone.
 I am alone.
 I've sought happiness through many ages and not found it;
 fame and missed it;
 love and not known it...
 My hands shall wear no wedding ring. Ah.
 Am I dead?
 Do not leave me
 I will offer you pearls of rainy words.
 Let's find a place for us!
 Do not leave me!
 I lived for five hundred years and... hardly aged a day. five hundred years
 I can't keep quiet, but I love trees, dogs and the night, but people?
 Hope.
 And it is the 8th of December two thousand and nineteen!
 I finally started to live and write as I like, but: my hopes are fading, but my rage remains!

サーシャ
 不実で、移り気で、気紛れで、悪魔、浮気者、詐欺師。
 ぼくには仲間が必要だ。
 あなた[グリーン]をお招きしたのは詩という神聖な主題をめぐって語り合うため
 シェイクスピア? 鹿肉をもっといかが? 鶏肉は? ワインは?
 私自身、無謀にも書いておりまして…詩をなのですが…
 私の詩になにかご意見いただけませんか?
 男どもにはうんざりだ
 うんざりなんだ。
 国王陛下にはぼくを大使に任命して
 限りなく遠い国に派遣してくれるように頼んである。
 殴り、殺し、中傷し、殺し、殺し、殴り、殺し、刺し、刺し、刺し、殴り、殺し
 亡骸が倒れ、その周囲に血の海が広がる。
 亡骸が
 どこもかしこも血まみれだ

わたしは女なの?
 疑いの余地はない。
 疑いの余地はないからだ、ひとりの女。
 とうとうわたしは独りだ。
 わたしは独りだ。
 幸福を求めて多くの時代を過ごしたけれど見つからなかった—
 名声を求めたけれど得られなかった—
 愛を求めたけれど知ることがなかった…
 この手には結婚指輪を嵌めぬままにしましょう。ああ。
 わたしは死んでしまったの?
 わたしを置いていかないで
 たくさんの真珠のような雨降りのことばをあげるから。
 ふたりの場所を見つけましょう!
 わたしを置いていかないで!
 わたしは500年も生きているのに…一日分も年を取っていない。500年も
 わたしは黙ってはいられない、でもわたしは木々を、犬たちを、夜を愛す。でも人間は?
 希望。
 そして今日は2019年12月8日!
 わたしはようやく思いのままに生きて書くようになった、しかし—わたしの希望は消えゆくこと、
 でもわたしの怒りは消えはしない!